



TITLE:

シピオーネ・アマーティ研究 ―慶
長遣欧使節とバロック期西欧の日
本像(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

小川, 仁

CITATION:

小川, 仁. シピオーネ・アマーティ研究 ―慶長遣欧使節とバロック期西
欧の日本像. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-07-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20638>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	小川 仁
論文題目	シピオーネ・アマーティ研究——慶長遣欧使節とバロック期西欧の日本像		
(論文内容の要旨)			
<p>慶長遣欧使節の通訳兼折衝役であったイタリア人イエズス会士、シピオーネ・アマーティ (Scipione Amati) に関する本論文は、序論と結論に挟まれて、以下の四つの章からなる。すなわち、第1章「コロンナ家と天正・慶長遣欧使節」、第2章「アマーティと慶長遣欧使節」、第3章「アマーティ著「日本略記」(手稿)の成立史」、第4章「アマーティの政治思想と日本情報」である。加えて、新出資料として「日本略記」の全文和訳を付録として掲載する。アマーティについては、日本はもとより本国イタリアでもこれまでほとんど研究がなされてこなかった。本博士論文が世界で最初の本格的なアマーティ研究であるといっても過言ではない。</p> <p>まず第1章では、アマーティが、枢機卿など高位聖職者を輩出したローマの有力貴族コロンナ家に仕えていたという事実注目し、申請者自身が発掘したコロンナ家の日本関連資料（ズビーアコ、サンタ・スコラスティカ修道院）の紹介と解説が試みられる。とりわけ、天正遣欧使節と慶長遣欧使節に認可された贖宥状は、これまで知られてこなかったもので、その中身が全訳で紹介されるとともに、その意味や機能が詳細に分析される。そのうえで筆者は、天正遣欧使節の贖宥状については、この使節と接触のあったことが知られる枢機卿アスカニオ・コロンナの要請によるものだろうという仮説を、慶長遣欧使節の贖宥状については、他の書簡類などをも参照しつつ、当時のコロンナ家当主の妻ルクレツィアの要請によるものだろうという仮説を提示する。そしてそこから、贖宥状が当時において外交ツールとしても機能していたことを明らかにする。</p> <p>第2章では、アマーティその人に焦点が当てられ、やはり申請者が発見した「ヴェローリ司教区におけるシピオーネ・アマーティ博士昇進についての事由書」を手掛かりにして、このいまだ知られざる人物の宗教的で政治的な経歴がはじめて再構成される。その結果、アマーティが1583年12月6日にトリヴィリャーノで生まれたこと、イエズス会ローマ学院に学んだこと、コロンナ家と密接なつながりがあったこと、タキトゥスやリヴィウスについて講義し著作も発表していたこと、1615年に支倉常長らとともにローマ市民権が与えられたことなどの事実が新たに浮かび上がる。さらに、アマーティの著書『伊達政宗遣欧使節』（1615年）の成立に、ルイス・ソテロからの影響が考えられることも指摘される。</p> <p>つづく第3章では、やはり申請者本人によって発掘されたアマーティの手稿「日本略記」（全79葉）が検討される。この手稿は全三部、すなわち「博物誌」（12葉）、「宗教誌」（22葉）、「政治誌」（45葉）からなるもので、本章ではまず「博物誌」と「宗教誌」の内容が、その典拠と考えられる、アレッサンドロ・ヴァリニャーノのものをはじめとするイエズス会年報や、ルイ</p>			

ス・デ・グスマンの『東方伝道史』（1601年）などとの比較において具体的に検討される。そこから明らかになるのは、アマーティがいかなる意図のもとで、典拠から取捨選択しているかという点である。申請者はこれに関してとりわけ以下の二つ、すなわち、政治的にも宗教的にも高い階層の慣習や風俗に記述が集中していること、信者と聖職者とのあいだの金銭授受については意図的に言及されていないことを強調している。こうすることで、比較的短い期間で著された「日本略記」は、ローマの有力貴族たちが望んでいる日本の情報をできるだけ簡潔に伝えようとした、と申請者は結論付ける。金銭授受への言及が避けられているのは、ローマ教会でも同様のことが起こってきた点を配慮したためであろう、という。

最後に第4章において、「日本略記」の大部分を占める「政治誌」が、16・17世紀の西洋の政治的・神学的な思想の文脈から検討される。ここから明らかとなるのは、次の二点である。まず、トマソ・カンパネッラの影響のもと、アマーティは、キリスト教の道德観念が日本に広まるなら、暴力が蔓延した君主政治から解放され、秩序立てられた国になると考えていた、という点。次に、アマーティは、当時支配的であったジョヴァンニ・ボテロの「国家理性」からは一定の距離をとっていて、共和主義と君主制とのあいだで揺らぐタキトゥス主義的な立場にあった、という点である。

以上のように本論文は、日欧交流史において重要な位置を占めるにもかかわらず、これまで研究史において看過されてきたイエズス会士シピオーネ・アマーティの人物像、著作、思想を、申請者自身が発掘した一次資料に基づいて再構築する先駆的な労作である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、これまでわが国はもとより本国イタリアでもほとんど研究されてこなかった、慶長遣欧使節の通訳兼折衝役にしてイエズス会士、シピオーネ・アマーティ (Scipione Amati) の人物像、著作、思想をはじめて再構成しようと試みる先駆的な研究である。本論文が高く評価できる理由を、以下に三点に絞って述べる。

まず最初に、申請者自身が発掘・発見した一次資料に基づいたきわめて高い実証的性格を持つという点。申請者は、アマーティが、枢機卿など高位聖職者を輩出したローマの有力貴族コロナ家に仕えていたという事実に注目し、コロナ家の日本関連資料が保管されているズビーアコのサンタ・スコラスティカ修道院 (コロナ文書館) やヴァチカン文書館などに繰り返し調査に赴き、「コロナ文書」として分類されているもののなかから、アマーティおよび天正遣欧使節や慶長遣欧使節に関連する手稿・手写本等を新たに発掘し、その解読と分析を踏まえて本論文を執筆している。その一次資料の主たるものは、以下のとおりである。①と②については全文訳が本文中に、③については全文訳が原文とともに付録としてつけられていて、資料としての価値もひじょうに高い。

- ① 天正遣欧使節にかかわる贖宥状 (III 74-17、1585 年 6 月 2 日、イタリア語手稿、全 1 葉、コロナ文書館) と慶長遣欧使節にかかわる贖宥状 (III 74-17、イタリア語手稿、全 2 葉、コロナ文書館)
- ② 「ヴェローリ司教区、シピオーネ・アマーティ博士の昇進に関する事由書」 (III TD、「一般索引・一般目録」集、トリリャーノ書簡集、コロナ文書館)
- ③ 未完の手稿『日本の自然、宗教、政治、それら三つの状態についての簡便なる記述』(「日本略記」と略記) (Fondo Borghese Serie I 208-209 50r-90r、ヴァチカン文書館)

次に、本論文の四つの章が、いずれもこれら新たな一次資料を踏まえているという点で、その構成力が評価される。すなわち、第 1 章「コロナ家と天正・慶長遣欧使節」、第 2 章「アマーティと慶長遣欧使節」、第 3 章「アマーティ著「日本略記」(手稿)の成立史」、第 4 章「アマーティの政治思想と日本情報」である。

第 1 章は主に①の解読と解釈にあてられる。そのうえで筆者は、天正遣欧使節の贖宥状については、この使節と接触のあったことが知られる枢機卿アスカニオ・コロナの要請によるものだろうという仮説を、慶長遣欧使節の贖宥状については、他の書簡類などをも参照しつつ、当時のコロナ家当主の妻ルクレツィアの要請によるものだろうという仮説を提示する。そしてそこから、贖宥状が当時において外交ツールとしても機能していたことを明らかにする。

第 2 章では、主に②に基づいて、これまでほとんど知られてこなかったアマーティの経歴が明らかにされ、慶長遣欧使節の通訳兼折衝役に任命される前と後のこのイエズス会士の動向に新たな光が当てられることになった。具体的にはたとえば、アマーティが1583年12月6日

にトリヴィリヤーノで生まれたこと、イエズス会ローマ学院に学んだこと、コロンナ家と密接なつながりがあったこと、タキトゥスやリヴィウスについて講義し著作も発表していたこと、1615年に支倉常長らとともにローマ市民権が与えられたことなどの新たな事実がある。

つづく第3章と第4章は、③の解説と分析と解釈を扱う。手稿「日本略記」は全三部、すなわち「博物誌」（12葉）、「宗教誌」（22葉）、「政治誌」（45葉）からなるもので、第3章ではまず「博物誌」と「宗教誌」の内容が、その典拠と考えられる、アレッサンドロ・ヴァリニヤーノのものをはじめとするイエズス会年報や、ルイス・デ・グスマンの『東方伝道史』（1601年）などとの比較において具体的に検討される。そこから明らかになるのは、アマーティがいかなる意図のもとで、典拠から取捨選択しているかという点である。申請者はこれに関してとりわけ以下の二つ、すなわち、政治的にも宗教的にも高い階層の慣習や風俗に記述が集中していること、信者と聖職者とのあいだの金銭授受については意図的に言及されていないことに注目する。その理由としてまず第一に、比較的短い期間で著された「日本略記」は、ローマの有力貴族たちが望んでいる日本の情報をできるだけ簡潔に伝えようとしたためであることが指摘され、さらに加えて、金銭授受への言及が避けられているのは、ローマ教会でも同様のことが起こってきた歴史的事情を配慮したためであろう、という仮説が提示される。

最後に第4章において、「日本略記」の大部分を占める「政治誌」が、16・17世紀の西洋の政治的・神学的な思想の文脈、具体的にはトマソ・カンパネッラ、ジョヴァンニ・ボテローの「国家理性」、タキトゥス主義との関連から検討される。より広い思想史的な文脈にアマーティの著作と思想を位置づけようと試みているのも、本論文の特徴である。

以上のように本論文は、わが国における日欧交流史研究に貴重な貢献をなすものであり、その成果は、欧米における同種の研究にも大きく利するものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年6月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降